



いけない薄着合宿

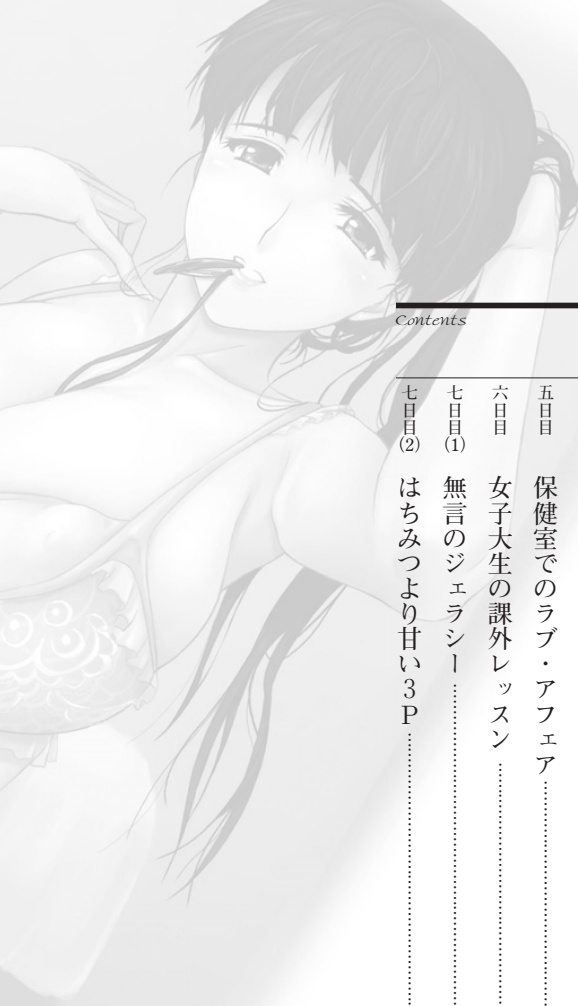
人妻と女子大生と女子高生

草飼晃

挿絵 / ズンダレぼん

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



一日目	春合宿、スタート！……………	4
二日目	危ない女子大生と手コキ初体験……………	36
三日目	嵐の午後の出来事……………	68
四日目	同級生と体育倉庫で……………	104
五日目	保健室でのラブ・アフエア……………	147
六日目	女子大生の課外レッスン……………	184
七日目(1)	無言のジェラシー……………	216
七日目(2)	はちみつより甘い3P……………	233

登場人物

Characters

篠原美沙子

(しのはらみさこ)

則文の所属する卓球部顧問の奥さんで29歳。おっとりとした抱擁感のある人妻。ぽってり豊満な身体つきをしている。

藤沢朱音

(ふじさわあかね)

美沙子の実の妹。卓球部の臨時コーチを務める20歳の大学生。あけっぴろげな性格のお姉様で、主人公にちょっかいをかけることも。

工藤こずえ

(くどうこずえ)

卓球部マネージャー。則文の同級生で大人しい少女。童顔、150センチくらいと小柄な身体ながら巨乳。

田口則文

(たぐちのりふみ)

高校一年生、奥手な少年。女性に興味はあるものの、気が小さくなかなか声がかけられない。

息がかかっただけで、あるいは則文の今のことばだけで、こずえは下腹部をぶるぶると動かしてやるせなさそうな声をあげた。まるでさっきの、感じちゃったと言ったときとそっくりに。

「えへへ……田口くん……わたし、今日、忘れられない日になっちゃうね」

照れ笑いもまたかわいらしい。則文は高まっていく一方の興奮に、返事もできなくなっていた。ペニスもずっとはちきれそうになっている。さっき一回出していなければ、こずえの性器を見ただけで放っていただろう。

とろり……今ほんとうに息だけで感じたのか、こずえの粘膜から透き通った汁がマツトに垂れ落ちた。おさまっていたかに見える息もまた荒くなっている。顔を見ると、思いつめたような顔つきで、瞳はなんだかうるんでいるみたいだった。

(どうしよう……もう少し、愛撫っていうのかな、したほうがいいのかな)

則文がどうしていいかわからなくなっただけ戸惑っていると、こずえは、

「田口くん……田口くんも初めてだから、よくわからないんだよね」

と言った。

「う、うん」

「だいじょうぶ。きっとうまくいくよ、わたしたち」

そのことばに励まされて、則文はそつと覆いかぶさるように、あらためて身体を寄せていった。こずえが両手を則文の背中に回してきた。むぎゅうとおっぱいをおしつぶす幸せな感触があった。

「痛くない……？」

うん、とだけこずえは口にした。その口にもう一度くちづけ。小動物を思わせるような薄い花びら色のくちびるを吸うと、今度はポニーテールの少女も同じようにくちびると舌をおずおずと動かしはじめた。なにかを意識してそうしているというより、自然に身体が動きはじめた、というような感じだった。

もう肌と肌はすっかり密着して、たがいの汗と汗が混ざり合っていくようだった。則文のペニスは直立しきつたままこずえの腹からももの付け根にかけてを先走りぬるぬるに濡らしてしまっていた。

「田口、くん、わたし、もうどうかなっちゃいそう……」

則文も同じ気持ちだった。身体と身体を擦り合わせているだけで気持ちいい。

「……うっうっ」

そうしているだけでこずえはまた高みに達してしまふ瞬間があるようだった。則文の肌が乳首を擦ったり、陰毛がさらさらとクリトリスのあたりを掃いたりするだけで。

「あう……わたし、恥ずかしい……っ」

教室でじっと黙って真面目に授業を聞いているときのこずえと同じ人間とは思えないほどの、なんだか動物じみた声を発して、肌をびくびくと震わせる。

則文も、エラがめいっばいに張りきっているような状態だった。いっそのこと、もうずっとこのままでも幸せだからいい、とも思ったが――。

「ねえ、則文くん……もう、いいよ、してみよう」

と、こずえのほうから求めてきた。

「うん」

とだけ則文は言った。顔を真っ赤にしたこずえに足を広げたままでいるように頼んで、勃起しきったものを指で下向きにおさえつけながら、狙いをつけていく。

（確か、この辺……かな）

朱音のものを見せてもらっていなかつたらもつと迷っていたろうが、見当はつけられた。漲りきった亀頭をこずえの美麗な粘膜にぎゅっとおしつけた。そのまま少しくちゅ、くちゅ、と動かしてみる。いちばん亀頭が感じやすいと思っていたのに、なんだかくりかえしていると痺れてきて、感覚があるのかないのかわからなくなってきた。そしてもつと先へ進みたいという歯痒さがこらえられなくなる。

「い、いくよ」

「うん——んっ」

ぬるっ、と入った。熱さが則文のペニスの先端から順にくるみこんでくる。少しずつ割れ裂いていく感覚があった。しかしこずえは痛がるそぶりは見せない。あれ、だいたいじょうぶなのかな、と思い、則文がさらに進めようとしたとたん、だった。

「うううっ……」

こずえが目をぎゅっつと閉じ、呻いた。則文の背に回していた手が離れ、身体をずり動かして逃れようとする。

(ど、どうしよう)

やめたほうがいいのかも……。

そうも思ったが本能には勝てなかった。こずえの肩をぐっつとおさえつけるようにして逃がさないようにする。逆に下腹部はいつそう先に打ちこんでいく。ペニスの先っぽを中心に感じていた焼けるような熱さが亀頭全体を覆いはじめめる。逆に先端に感じていたつかかりだけがスッと抜けていた。肉輪を拵げながらなおもめりめりと進めると、エラや胴体全体がびっつちりとした締めつけを受けていた。ギリ、ギリ、ギリという、まるでこずえの鼓動がそのままつたわってくるような締めつけだった。

「う……う——うっ」

こずえは菌を食い縛っている。でもまだ——則文の胴体は少し外に残っている。

「則文くん、平気、だから、きて……」

こずえのことはにうなずき、一気にすべてを埋没させていた。ずぼぼっ、と深い衝撃が腰に走った。

「うおっ」

「痛あ……っ」

則文は、亀頭で感じた、熱い肉輪を裂き広げた一瞬の感觸のあとで、下腹部全体がこずえの中に包まれてしまったのかと思っただけだった。則文の体重の下でこずえの肢体がびくんと一回苦しげにうねった。

「痛い？」

「うん……うん」

こずえはあいまいな答え方をした。どっちと尋ねると汗まみれの少女は言った。

「則文くんだから、痛く、ない——」

「こ、こずえちゃん」

「はい」

思いがけずに素直すぎる返事をされて則文は戸惑ってしまった。自分がなんと言おうとしていたのかもわからなくなってしまった。それよりも、包みこんでくる高等部一年生の女子の身体は気持ちよすぎた。相手のことを気遣っていられたのはそこまだった。ゆつくりと動かしはじめた。

「あ。あ。やめ——」

こずえが言いかけたが、途中でことばを飲みこんだ。則文の好きにさせようと思ってくれているようだった。少年のほうはもう相手の顔色など見ていられなかった。少し動かしただけでも根元のあたりがぎりぎりりと締めつけられる。エラをくるんでくる脈動もたまらない。こずえの腹や腰が少しだけ左右にくねる。

「うっ……則文くん——くう、いた、いた」

相手の声が則文の耳には心地よい刺激となっていた。流れる汗が目に入ってきたけれど拭うことなど忘れていた。心臓の奥のあたりでなにかがドクンと弾け、それが腰へ下がり、そのまま熱い塊となって股間へ進んできた。同時に胸の中に切なさの塊みたいなのがいっぱいに押し寄せてきた。

「こずえちゃん、だ、だいじょうぶ……?」

「う、うん、平気……あ、うあ」

こずえは相変わらず苦痛をこらえるような表情のまま。細い肩が、太ももが、半分硬直でもしたみたいになって、ただただ十五歳の少年の律動に身をまかせるばかり。手の指はなにかを握ろうとする途中のようなかたちで固まってしまったままひくひく震えるばかり。

身体をおしつけると自分の陰毛とこずえの陰毛が擦れ合う。それだけでも幸せなのに、からみつく粘膜と自分のペニスを一体にさせている悦びといったら！ 自分のが脈打っているのか膣の脈動が伝わってきたら！ 自分もわからなくらいひとつになってる！ 腰をゴリゴリと遣いつづけ、身体全体を相手の小さくて弾力のある白い裸体におしつけて、快楽に耽りつづける。

（ああ……美沙子さんの中もこれくらい気持ちいいんだろうか——？）

則文にはいつしか相手のことは見えなくなっていた。

（はあっ、はあっ、はあっ、す、すごいよ、すごいよ、はあっ、はあっ……っ）

海綿体で感じるキツさと熱さとやわらかさ。胸板から首すじにかけて苦しそうなこずえのはあはあという湿った吐息がかかってくるが、それがまた気持ちよさを加速させてくれる。動きを止めると、根元から先端までびっちりと包まれているのがわかった。ここまで一体になれるだなんて想像以上だった。自分の身体なのに根元の奥のほ



うが痺れてきて、まるで他人の身体みたいだった。どこからどこまでが自分の身体なのかもわからなくなっている！

もうダメだ！

思ったとたんドクン！ と噴出がはじまっていた。ぴったりと密着しあったペニスと膣粘膜。その奥で、則文のものはどっくどっくと本能に導かれるままに放出をはじめていた。肉でできた粘膜の輪に包まれて出すのがこんなに気持ちがいいなんて！

「ああ……美沙子さん、美沙子さん——ぼく、気持ちいい……ッ、うあああああ」

眉をつらそうにひそめて恋する男子生徒の放精を受けとめていたこずえが、はっとした顔つきになった。

則文は気づかなかった。

ドピユ、ドピユ、ドピユ、ドク、ドク……深く貫きもぐりこませたまま精液を思う存分撒き散らす快楽に酔っていた。女の子ならではの丸みを帯びたやわらかい身体に体重をかけながら出しつづける間に、何回も何回も頭の中でぱちぱちと火花が散って、それがいつそう則文からふだんのまともな意識を剥ぎ取っていた。

「あああ、すごいよっ、すごいよおっ、ま、まだ出る、すごい、うあああ……ッ」
出す気持ちよさは理性でどうにかできるようなものではなかった。激しい放出感に

腰がぶるぶると痙攣をくりかえした。荒々しい本能だけに衝き動かされて放ちつづけ、流しこみつづけた。下腹部の底から湧きあがる煮えたぎった湯のようなものが腰を痺れさせつつ、細い尿道を幸福感で満たしながら次々と通り抜けていく！

粘膜の中が吐き出されたものでいっぱいになってしまったのでは、というころにやっと、発作のような射精はおさまりを見せた。

引き抜く。焦りすぎたのか、抜いた拍子にどろりと自分の出したもので相手の粘膜をよごしてしまった。抜き方にもコツとかあるのかなと初めて思った。

中に入っていたのはわずか一分間くらいだっただろう。でもそれまでの学園生活のどんな一分間よりも幸せな一分間だった。

（ええと——どうしよう。ぼく、ティッシュとかないいしな……拭いてあげたいけど）
それに。

（ヤバイかも……）

つい中で出してしまった。朱音さんにもらったコンドームのことを忘れていた。頭の中が急に冷えたとたんに思いだした。こういうときはどうすればいいんだろう？

則文が戸惑っていると、呆然とした顔つきのマネージャーは、脱いだ下着を股に当てて出血の具合を確かめてから、則文の見える前で服を身につけはじめた。服を着

終わってからも、うつむいたまま、ぐず、ぐず、と鼻を鳴らしていた。そして、あのう、と則文が話しかけるよりも前に、

「ひどいよ」

と涙声で言った。

「わたしたち、初めてだったのに、初めてだったのに……他の人のこと考えてただなんて、ひどすぎるよ、田口くん——美沙子さんって。美沙子さんって」

わあっと泣きだしたこずえ。

則文が手を伸ばそうとすると、

「さわらないでっ」

さけんで体育器具倉庫を飛び出していった。

(工藤さん……)

体操マットの上にはふたり分の汗と、こずえの股間からこぼれ落ちた汁が染みをつくっていた。ペニスを弾き出させたままの則文はどうすることもできずにいた。

汗の匂いとこずえの体臭だけがまだ残っていた。

妹がなにを企んでいるのかわからない人妻は、少し不安そうな面持ち。夜の空気もわずかだけれど冷え込みつつある。しかし肉体の興奮はまだおさまりきってはいないようで、白い臀球と臀球のはざまはとろとろの蜜を滲ませて光っている。

朱音は美沙子さんのお尻の肉をおさえるようにしながら、その中心の小さな小さなすばまりに、はちみつを塗りたいくった指先で触れた。たちまち美沙子さんは、いやっと言って後ろを振り返る。けれど妹がすでに主導権を握っていた。姉の背中をおさえつけつつ、動くさえぐつちやうわよ、と言って指でマッサージをつづける。

「ん。ほぐれてきたかな。じゃあ則文くん。これから則文くんが挿れるところだから、舐めてあげて。できるわよね？」

則文はことばを失った。

(挿れるところ？ 舐めてあげて？ ええっ……?)

「え……そ、そんなところ、でも」

「姉さんのことが好きなら、できるでしょ？」

そう言われたら、確かにできる、とは思えた。

「……うん」

うなずいて、はちみつにまみれたアヌスに顔を寄せ、くちづけた。

「いや、だめ、則文くん、そんなところ、いや、恥ずかしい……だめよ、不潔だわ」
美沙子さんが這って逃げようとするが、それを朱音ががっしりと横から抱きしめて
阻止してしまった。則文は舌先を挿しこみながら思った。別にぜんぜん不潔なんかじ
ゃないよ、と。そう口に出して言っただけだが、それでも美沙子さんは恥ずかしいわ
恥ずかしいわと、そればかり口にする。

「かわいいよ。美沙子さんのここ……」

短くて細かいかすかな皺のひとつひとつの上で這わせるように舌を動かす。はちみつ
の匂いしかしなかったし、舌も別にそれ以外の刺激は感じない。唾液をたっぷりと乗
せて舐めまわすうちに、そこはほんわかと温かみを帯びてきた。と同時に美沙子さん
が則文の舌のひと擦りごとに、ひく、ひく、と喉の中で呻くようになってきた。

「ほぐれてきたみたいだから、今度は舌の先つちよで中をきれいにしてあげて」

「い、いやっ、則文くん、お願いだから、もう充分だからっ、お願いっ、いや——」

ことばは途切れ、ひいつと美沙子さんが声をあげた。則文の舌がれるっ、と中に入
りこみ、擦りたてはじめた。シロップみたいなのはちみつを潤滑液にして何回もねとね
ととくりかえす。すると次第に端正な肛門の菊皺もますます赤みを帯びた色に変わっ
てきた。それにつれて人妻の声もますます甘くなってくる。

「すごい、美沙子さんのお尻の穴、なんかひくひくしてきたよ。感じてるの……？」
「いやっ、言わないで、則文くん。いじわるしないで。おねがいよ、ね、則文くん」
いじわるしてるわけじゃないよ、美沙子さんを気持ちよくさせてあげたいだけだよ、
と言って則文は肛門舐めをつづける。そのことばに嘘いつわりはなかった。ふっと息
を吹きかけると皺の周りの皮膚がひくんと震え、少しだけほぐれを見せる。それをみ
はからい、再度舌先を尖らせて中にもぐりこませた。人妻は抗議ももうできず、口を
閉じて反応を見せまいとしているようだ。こんなところで感じている、ということ
認めたくはないらしい。ところが。

「ん。だいぶほぐれてきたみたいねっ。じゃあ則文くん。指を挿れてみてくれる？」
という朱音のことばに、

「そ、そんな……っ」

またうろたえ出した。則文が、くにゅ、くにゅっ、くにゅう……と指の出し入れを
くりかえすと、黒髪をぶるぶると揺らしながらすすり泣きはじめてしまった。則文は
はちみつを指に塗り直しつつ、何回も美沙子さんのアヌスに指を通す。入口付近では
いまだにキツく指を拒絶するような動きを見せても、中のほうでははちみつをたっぷ
りとまといつかせた指先を吸いこむような動きを示してきた。勢いにまかせて奥に食

いこませた指で直腸壁を押しして拵げさせると、美沙子さんが喉の奥から呻き声をあげた。

「ひゃああんっ、則文くん、わ、わたし、それ感じちゃうから——おねがい、やめ」同じことをくりかえしてあげると、人妻は背すじをビクンと伸ばし、則文の目の前で丸いお尻を震わせて身悶えしはじめる。肘がかくんと折れ曲がって上体が地面にくずれ落ち、お尻だけを掲げた姿勢になっていた。

「はうっ、はうっ、は、はう、だめ、っち、っっちゃう、則文くん、もうやめて——」
「美沙子さん、すごい。感じてるんだ……」

「そろそろ挿れてみようか、則文くん。おちんちんにもたっぷりはちみつ塗ってね」少し気温が下がってきたせいか、はちみつはちょうどいい加減のジェル状になっていた。ペニスにそれを塗りたくった。あてがうと恐怖感があるようで、ほぐれているのに美沙子さんはビクンとお尻を動かし、肛門もすぼめてしまう。朱音が横から手を伸ばして、だいじょうぶだから、と声をかけてくれた。跳ね返そうとしてくる菊門にねじこむように、亀頭を押し入れていく。

「ほら、お姉さん。息をふうーって吐いて。すぐに則文くんとひとつになれるのよ」人妻が素直に息を吐いたらしい瞬間、則文は一気にめりこませていた。エラの広が

いう締めつけが起こってきた。

「ち、ちからが、ぬけて、おかしくなる——っあ、な、なにかくる、ああ嘘っ……」
美沙子さんが急に喉をのけぞらせた。

「いく、いく、うそ、お尻で、イッちゃう、ああやだ、恥ずかしい、ああ、イクッ」
ペニス信じられないような圧迫を受けていた。痙攣のように直腸が締めてきた。
「ああっ強いっ、強いっ……則文くん、則文くううんっ、はあああううんっ」
襲いかかってきた連続絶頂の大波にもてあそばははじめたようだ。夜空に向かつて
声は何度も何度もこだました。汗が飛び散り、すぐ下の媚粘膜からは愛液がびしゃつ
と飛び散った。豊満なおっぱいがぶるんぶるんと揺れ、先端からはまるでミルクみた
いな濃い汗汁が地面にとろとろと落ちていた。

則文のものを包みこんだまま痙攣をつづける直腸粘膜が、焼けるように熱いまま
うねった。お尻も背中も肩も髪も絶頂汗に濡れててかり、輝いていた。ふくらはぎも
足首もぶるぶると震えている。アクメを止められなくなっている。

「ごんごん、いってるう、則文くん、きてっ、わたしだけなんて、くあっ、くああ」
「こ、腰が、もう、勝手に、うごいて、だめだあ、美沙子さあん、うわあああっ！」
ぎりぎりぎりとして締めつけてくるすさまじい圧力に則文も限界を迎えかけていた。と。

さらなる後押しがあった。いつの間にか美沙子さんから離れて則文の後ろに回った朱音が、はちみつを塗ったピンポン球を則文の肛門にねじこもうとしてくる。

「朱音さんっ、いくらなんでも、それ、無理だあ、やめてよう、ぼくもどうかなる！」
「無理じゃない。姉さんだっけきみのを呑みこんでるんだから、きみだっけ。それっ」
本当にぶりゅつとピンポン球を呑みこまされてしまった。女子大生の指でそのままぐいぐいと押されて、球が前立腺を擦ってきた。美沙子さんの直腸の締めつけとの二重の責めには、則文ももうひとたまりもなかった。肉茎の中を火炎のような熱い精液がずんずん駆け昇ってきて、一気に爆ぜた！

「ああ、美沙子さんっ、出ちゃった、で、出てる、ああ、美沙子さんの中に、ああ！」
「す、すごい、のりふみくうん、すごい、すごい、すごいっ……ううっ、ううっ、うう」
爆発のような放精を浴びることで、人妻も頂点の上のさらなる頂点に運ばれているようだった。連続しての激しい絶頂にがくがくと腕や肩や腰や背中が震えている。そんな人妻の直腸の奥深くに向けて、則文は放ちつづけた。噴きこぼしつづけることがここまで気持ちがいいとは。うねりまくる直腸粘膜に出す悦楽は、女性器に出す悦楽にもけっして負けない幸せがあった。

（い、今、ぼくが出しているのは——まだ誰も出したことのないところなんだ！



初めてのところにぼくが精子でしるしを残しているんだ！

その喜びはなににも代えがたかった。濁流が快感といっしょに尿道を通り過ぎる。出しつづけるのに合わせるようにして美沙子さんも喉から、けだものみたいな呻き声をあげて絶頂がつづいていることを教えてくれる。

「則文くん、と、こうやって、初めてを、したかったあ、きてるっ、きてるうっ！」

「ああ、美沙子さあん、すごいよ、すごい、まだイク、ぼく、ずっとずっと、ああ」
人妻の直腸は精液を呑みこみつづけてくれた。出す歓喜は熱い炎のように則文の背すじを何回も貫いた。美沙子さんも同じ歓喜に包まれ貫かれているのが則文にはよくわかった。教師の妻と生徒との禁断の肛交はおさまりを見せなかった。

「ああまた、イッチャう、わたし、則文くんと、ずっとこうしていたい、則文くんがほしい、渡したくなんかない、則文くんとずっとふたりでいたい、ふはあふはあっ」
「わかるわよ、姉さん。そうしたいのはあたしだって山々よ。こずえちゃんもあたしと姉さんと三人で囲んじゃえたらってあたしも考えた。でもみんなのためには、それはよくないのよ。今あたしたちがこうしていることだって、もしこずえちゃんが知ったら、ショックが強すぎると思う。そんなかわいそうなこと、あたし、できない」
則文はハッとされた。こずえがこのことを感じている事実を朱音は知らないのだ。

だが、うしろめたさも、同級生の小柄な少女を気にかけることも、今の美沙子さんの豊かな身体から与えられる気持ちよさの前にはすぐに霧のように消えてしまった。理性は遠くへ去り、うねりつづける肛交の快楽だけに則文の意識は肉体ごとさらわれていた。股間を中心にして何回も射精の快楽が火の粉をあげて爆ぜまくり、その目の前で美沙子さんの白い背中や丸いお尻がよがり泣きに震えつづけていた。

「くわあ、美沙子さあん、すごいよ、吸いこんでくるう、好きだよ、美沙子さあん」
「ああ則文くん、だいすき、ああわたしました、つあ、ま、また、んうっ、んうっ！」
長い時間をかけてどっぷりと出し終えた則文がようやくつかないでいた身体を離れたとたん、人妻が四つん這いだった身体を、どざりと横たえた。汗や涙でぬるぬるの裸体。大きなおっぱいは激しい呼吸でふくらんだり、元に戻ったりをくりかえしているように見えた……。

ふたりの熱が下がりきるのには十数分かった。

それから――。

夜が少しずつ更けて、さすがに冷えてきた。空には相変わらず星がまたたいている。朝や夕暮れにはやかましいほどのさえずりを聞かせる鳥たちも寝静まっているのか、グラウンドも、学校の周りも、昼間以上にがらんとした印象しかなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!

Valkyrie



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!